

# 令和5年度 文京区障害者地域自立支援協議会

## 第3回 権利擁護専門部会 次第

日時：令和6年2月19日（月）午後2時～4時

会場：文京区民センター3階 3A会議室

### 1 開会

### 2 議題

- (1) ケースを通じたライフステージ（ライフイベント）における意思決定支援について
- (2) 文京区障害者地域自立支援協議会全体会について
- (3) その他

#### 【配布資料】

資料第1号	令和5年度文京区障害者地域自立支援協議会権利擁護専門部会委員名簿
資料第2号	ケースを通じたライフステージにおける意思決定支援について（前回まとめ/ケース①）
資料第3号	ケースを通じたライフステージにおける意思決定支援について（前回まとめ/ケース②）
資料第4号	第2回権利擁護専門部会要点録
資料第5号	知的障害者の方の事例（当日席上配付・要回収）
資料第6号	精神障害者の方の事例（当日席上配付・要回収）
資料第7号	文京区障害者地域自立支援協議会全体会について
資料第8号	文京区障害者地域自立支援協議会全体会における権利擁護専門部会報告資料について

## 文京区障害者地域自立支援協議会 権利擁護専門部会委員名簿

令和6年2月19日

敬称略

役職名	委員名	所属機関・団体・施設名
協議会会長	高山 直樹	東洋大学 福祉社会デザイン学部 社会福祉学科 教授
親会委員	松下 功一	文京槐の会 は〜と・ピア2施設長
委員	皆川 謙	文京区障害者就労支援センター 主任
〃	清水 健太	文京地域生活支援センターあかり
〃	美濃口 和之	文京区障害者基幹相談支援センター 副所長
〃	坂井 崇徳	弁護士
〃	箱石 まみ	司法書士
〃	新堀 季之	社会福祉士(高齢者あんしん相談センター駒込センター長)
〃	保坂 勇人	文京社会福祉士会 事務局長
〃	今本 美和子	文京区民生委員・児童委員協議会 本富士地区
〃	山口 恵子	知的障害者相談員
〃	杉浦 幸介	当事者委員
〃	久米 佳江	当事者委員
〃	平石 進	文京区社会福祉協議会 権利擁護センター係長
区 委員	櫻井 智子	福祉政策課 地域福祉係長
〃	福田 洋司	身体障害者支援係長(身体障害者福祉司)
〃	荒井 早紀	知的障害者支援係長(知的障害者福祉司)
〃	佐藤 祐司	予防対策課 精神保健係長
〃	柳瀬 裕貴	予防対策課 保健指導係長(保健師)
事務局	伊藤 真由子	文京区社会福祉協議会 権利擁護センター
事務局	古賀 四季穂	文京区社会福祉協議会 権利擁護センター

ライフステージ	幼児期 0歳から5歳	学齢期 6歳から14歳	青年期 15歳から29歳	壮年期 30歳から44歳	中年期 45歳から64歳	高齢期 65歳から
ターニングポイント 想定されるライフイベント				計画相談の導入 (総合相談・総合的なアセスメント)	8050 (あと20年) / 9060 (あと30年) で何ができるか	
どんな情報			多様な情報・経験の場の提供	地域福祉権利擁護事業の利用		
必要な経験 (意思決定支援)			家族や施設の人など係わる人が限られる (特に卒業後)	福祉サービス (外出のサポート) の導入	親亡き後への備え	
利用サービス			卒業後のことの情報提供	親元から離れる経験 (ショートステイ)	お金の使い方 (本人がやりたいのかどうか)	本人と決める 何からやるのか? 本人への情報提供
住居			いろいろな経験をする場 (社会人になってからもサークル参加等)	自分でできることを増やす	親亡き後の金銭管理の相談	
経済面		異なる環境下でのアセスメント・強みの理解	若いうちからショートステイなどの経験	生活あんしん拠点 (慣れている人を増やす)	成年後見・親亡き後の相談 法律相談の活用	(地域での) 居場所
	長期・継続的な支援 伴走型支援	①家族②職場③地域からの情報を基にしたアセスメントの必要性		計画相談 ケアマネへのスムーズな移行へ	独居考える時に親の介護の担い手になってしまう →学齢期や青年期からから準備 (経験)	サークル活動 (場づくりや継続させること) の難しさ
	療育・教育・福祉 切れ目のない支援	どこにストレングスがあるか (過去に係わった人に聞いていく)	仕事以外で家庭内での生活どれくらいできるか	親亡き後の生活を親存命中に考える		地域・余暇活動
	先を見通して方向性を決めながらの相談支援	子家セン・教育センターなど18歳未満支援機関との連携		意思決定に対するエンパワメント 再アセスメント (本人像が見えるように)		地域の人からの情報提供
	ロングスパンで係われる人 (早めの段階で)			福祉サービスを利用してなくても相談機関がバトンリレーできるのか		地域の人との情報共有や連携の仕方
相談機関 頼れる人						地域の人が誤解や偏見を持たないような取り組み
制度利用に向けた準備 権利擁護	「主治医」をつくる 継続的な係わり			具体的なサービス・再アセスメント・意思決定支援		

ライフステージ	幼児期 0歳から5歳	学齢期 6歳から14歳	青年期 15歳から29歳	壮年期 30歳から44歳	中年期 45歳から64歳	高齢期 65歳から
ターニングポイント 想定されるライフイベント どんな情報 必要な経験 (意思決定支援) 利用サービス 住居 経済面				<p>主治医の意見（職場復帰可能かどうか）</p> <p>就職は本人の希望？ 周りの促し？</p> <p>過去の情報→「就職の希望」へのアセスメント</p> <p>支援の際のポイント・具体的なサービス</p> <p>どう自立して生活するかから組み立てる</p> <p>経験を積む・成功体験→決断できるように</p>		
	再アセスメント・ポイント				信頼関係・居場所・意思決定支援	
	<p>家族（家庭）内での心地良い場所</p> <p>本人の家族の捉え方「祖父母」</p>			<p>支援チームの再構築</p> <p>伴走型の支援</p> <p>計画相談の導入</p> <p>ピアカウンセリング</p>	<p>誰に心をひらけるか（心の安定）</p> <p>（施設に限らず）本人が話をできる場</p> <p>本音・本当の気持ちを誰が聞き出せるか</p> <p>帰属感 場・居場所</p> <p>本人の話を聞いてくれる→信頼関係へ</p>	
	<p>再アセスメントの必要性（医療・本人の状況など）</p> <p>幼児期からの反芻</p> <p>（それぞれの時期の）ジェノグラム</p>	<p>再アセスメントの手段</p> <p>情報を得られる手段や人</p> <p>児相（情報だせないののでどう働きかけるか）・養護施設からの情報</p>	<p>過去も含めた本人の事情を知る</p>			
相談機関 頼れる人			<p>細く長くつながっていける関係（保健師）</p>	<p>医療機関は年齢に関係なく継続的に係わられるのでは カウンセリング</p>		
制度利用に向けた準備 権利擁護						

令和5年度 文京区障害者地域自立支援協議会  
第2回権利擁護専門部会要点録

日時 令和5年12月11日(月) 午前10時～正午  
場所 文京区民センター2A 会議室

出席者：

協議会会長 東洋大学福祉社会デザイン学部社会福祉学科教授 高山直樹  
親会委員 文京槐の会は～と・ピア2施設長 松下功一  
委員 文京区障害者就労支援センター主任 皆川譲、  
文京区障害者基幹相談支援センター副所長 美濃口和之、  
弁護士 坂井崇徳、  
司法書士 箱石まみ、  
社会福祉士 新堀季之、  
文京区民生委員・児童委員協議会 本富士地区副会長 今本美和子、  
知的障害者相談員 山口恵子、  
当事者委員 久米佳江、  
文京区社会福祉協議会権利擁護センター係長 平石進

区委員 福祉政策課地域福祉係長 櫻井智子、  
身体障害者支援係長 福田洋司、  
知的障害者支援係長 荒井早紀、  
予防対策課精神保健係長 佐藤祐司、  
予防対策課保健指導係長 柳瀬裕貴

欠席者：

文京地域生活支援センターあかり 清水健太、  
文京区社会福祉士会事務局長 保坂勇人、  
当事者委員 杉浦幸介

事務局：

文京区社会福祉協議会次長 石樵さゆり  
文京区社会福祉協議会権利擁護センター 伊藤真由子、古賀四季穂、  
山田晶子、新井未来

傍聴4名

## 1 開会

## 2 議題

(1) ケースを通じたライフステージにおける意思決定支援について  
松下部会長より趣旨説明。

- 専門部会は長年にわたり権利擁護の制度や意思決定支援をテーマに話し合ってきた。地権や後見制度、信託など制度説明のパンフレットは揃っているが、前段階の準備の話はあまり示されていない。また、制度利用後は後見人任せ、支援者離れもあり、チームの継続が重要だが、説明が不足しているという意見もあった。  
また、委員自身も日常的に対応している対象者が様々なので、「障害者」と一言ではくくれないと常に思っていた。そこで、1つのケースに対して同じ目線で話をしていく必要があると思い、そのような趣旨で今日は一般就労している人に絞って話をしたい。同じケースを見ながら全体で話し合うことで、備えなどの具体的な話し合いができると良い。

資料第3号「自立（一般就労）を目指す事例（当日席上配布・要回収）」に基づき、説明。

### 【事例のケースに対する質疑応答】

- ケースについて質問。1ケース目の本人のこだわりとは具体的にどんなことか。
- 厨房の中では排水溝に溜まるゴミをひたすらきれいにしたり、直接手で綺麗にしてしまうことがある。注意しても改善が難しく、1つ目2つ目の会社はうまくいかなかった。今の会社でもそうした特性は出ているが、職場の方との相性がいいのか、声掛けするとその通りに止めている様子。  
又、道にゴミが落ちていたら捨てる等こだにわりが見られる。
- 初めて障害者雇用をする会社だが、配慮をしたというのは具体的にどういうことをしたのか。
- 特性についての情報共有をした。また、曖昧な指示ではなく、はっきりと伝えることや、物の置き場所の固定を促した。業務は食器洗浄が基本だが、空き時間に食堂に並ぶ調味料の補充をすることもある。補充は目安のラインを設けてもらうなど、環境整備も行った。パートの方がよく見守ってくれており、しっかり注意もしてくださるので、そうした配慮もある。
- 2ケース目について、対人関係のつまずきとは具体的にどんなことか。
- 比較的話好きな方ではあるが、趣味の世界の話の際は、一方的に話してしまい、相手の方が引いてしまったり、次から無視されてしまうといったことがある。そうしたことが続き、実習先で他の利用者たちのグループに話しかけにくい等、不安が重なって作業に影響してしまうといったことがあった。
- 1ケース目の方について、福祉サービスの利用検討中とのことだが、具体的にどんなサー

ビスを検討しているのか。

- 外出へのこだわりがあるため、外出に同行できるようなものなど話をしている。また、親亡きあとのことも考えて短期間のショートステイの話など出てきている。
- 1 ケース目の方について、お給料やお小遣いの管理は今どのようにされているか。
- 給与は親御さんが管理している。本人はあまり使わないようなので、定額のお小遣いを渡している状況。

この先どのようにしていくか、資料第 2 号を用いてマイクを回しながらみんなで書き落とししていく作業をしたい。様々な意見が出ることでいろいろ見えてくると思う。それをベースに事務局でまとめていくと色々なことが整理されていき、次々に様々な対象について考えていくというやり方をしたい。

#### 【ケース 1 について】

- サービスの利用検討を誰に相談するのか。弁護士が相談の対象になるのかというのが聞いていて思ったところ。相談を受けたとしたら、知的と言っても就労できるほどなので補助人つけるかどうかの話になってしまうかも。継続的に弁護士に相談するようなサービス、顧問的なものをやるのは少し重いように感じるので補助人の話になるかも。親亡きあとの問題になると後見的な法律相談になる。
- 特別支援学校からの就労ということだが、卒業後の相談先を悩むと思うので、支援学校の時から卒業後の相談先について実際に対面で情報提供できるといい。散財はしないようなのでしばらく財産管理は大丈夫そう。親との年齢差にもよるが、中年期辺りから親が 80 代になって実際に危機感を感じて具体的な相談先を検討すると思うので、パッと入っていったらいい。
- 独居もしくは両親が高齢といった方に民生委員がどのように関わっていけば良いかを考えた。どうすれば地域の方が誤解や偏見をもたないようにできるか。地域の方はどうしても誤解が先に走るところがあるので説明を個別にすることもある。地域で自然に生活できるような手伝いができるといい。民生委員の場合は出会った頃、知り合った頃が関わりのスタートになる。また、地域で目立ち始めた状況がスタートの方もいるので、関わりの段階は明確にない。
- サービスを利用するときに家族以外との関わりに抵抗があり、自閉症の場合は特にいつも同じことで安定しているのでなかなか次の一步が踏み出せずにいることが多い。それが長いこと継続すると新しい段階に行くときに大変、いろんな経験をする場が確保されることが大事。親の会でそうしたこともしていたが、1 人で運営していたので続かなかった。参加者が少ないとイベント自体が運営できなかつたり、課題もあるが機会がたくさんあればいいと思う。
- 金銭管理は親御さんとのことだったので、地権を使ってお金のやりくりを自分でやってみるのもありかと思った。時期は親がいるうちが安定するとも聞くので、他の機関と兼ね

合いを考えたり。お金も、使いたい物があるのであれば、給与の範囲で使っていくことも考えていけたらいいと思う。

- 親御さんが元気なうちに早めにそうした経験をもてる機会を設けたらいいのではないかと。これから必要に応じて後見人に移行されると思うが、いずれどのように生活されるかは親と相談する必要がある。
- 10年近く同じ職場で勤務していたり、能力がある方だと思った。家庭でどのくらい自分のことができていたかわからなかったのが、将来継続して関わられるのはどんな人か考えていた。計画相談に長期的に考えてもらって今の段階で何が必要か考えてもらうのがいいかなと。家族が亡くなってから動き出すと選択肢の幅が狭くなるので、家のことや自分のこと、生活のことをどのくらいできるのか、少しでも選択肢を広げられるように通所などできると良い。
- 医療的なところがどうなっているのか気になった。サービスを使う際に医療機関にかかっていないケースが結構ある。医療面が不明なこともよくあるので、継続的な医療機関との関わりも必要。
- 若いうちから変化を経験できるように、学齢期、青年期など序盤から、中年期よりも早い段階でショートステイの提案をするようにしている。
- これからサービスの利用を検討されているということなので、慣れている人を増やすという意味では拠点とのつながりも作るという。65歳になれば介護保険に移行していくので、ケアマネとつながる仲立ちをする拠点とのつながりも大事。
- この方は18歳未満の時は学校での手厚い支援があっとうまく就労に結びつき、比較的支援者も関わりやすい方という印象があった。子どもの支援関係者との18歳を境にした連携をどう事前にとれるか。
- やり方によっては獲得できる能力がある方。時間をかけていくことによって獲得できるチャンスがある。いつ頃にどんなことにチャレンジできるかを本人と決めて行けると良い。お金の使い方についても本人がどうしていきたいか、できるできないではなくて、チャンスがあることを本人が知ることが大事。福祉サービスの導入も転機で、導入によってどんなことが見込まれるのかを本人と考える。
- 福祉サービスを利用していなくても相談を受ける機会がどのように担保されてきたのかが気になった。先を見据えてその方がどのように生きていきたいかを誰かが考えながらだといふ。サービス利用してなくても相談先がリレーしていくといい。経験の積み重ねを本人に保証できると思う。
- このシートを通して、その人がどういう意思形成をしてきたのか、どういうところに関心をもってきたのかがわかり、その人の像が見えてくる。これまでに関わった人すべてにアセスメントしながら本人像を作っていくことが重要。家族、職場、第3の居場所の3点にアセスメントを行うべき。第3の居場所に関しては、地域の中で自由な関係性、体験ができると自分の意思が出てくるはず。アセスメントしながらその人の意思がどこにあるのか確認し、エンパワーしながら支援を構成していく。過去の人たちもケース検討会議に



入り、どんどん切れ目なくメンバーが増えていく形で一緒にアセスメントしていく状態が作られていくといい。

- 昨日、移動支援の研修に参加して、地域に出ていく、余暇活動の重要性が見えてきた。あえて週末ショートステイに行くとか、どこかに少し出かけることの積み重ねがいかに重要か。

## 【2 ケース目について】

- 対象者を尊厳を持った人として見るためにも、物語を知ることが大事。この方の場合、家庭環境が複雑であるとのことで、放置、放棄されたりして育ってきているかも。そうするとスキルの習得や経験がなかったと思う。こういう方の場合には最終的な意思決定をどのようにやっていけるか。経験がない分野で申し訳ない。
- 独居で生活しているので、今の自身の生活をどのように自立できるかをクリアしていくことが重要。その積み重ねで先が見えてくる方ではないか。決断できない方はたくさんいるので、成功体験があればいい。他人頼みになって、責任を周りに転嫁する方も多いので、なかなか性格は変わらないと思うが、ずっと付き合っていくことで将来を見ていく必要がある。
- 祖父母に育てられたところが気になった。孫と子どもでは育ち方が違う。家族をどういう風に考えているか。就職を希望しているというのは本人の意思なのか。周りから促されてのものなのか。どなたに心を一番開いているか、祖父母とは違う同年代の方等、本音を引き出せる誰かがいないと。本人の意思を誰が引き出してあげるかがまず大事。
- 精神の方は特に気持ちの安定が大事。話をしているうちに気持ちが整理されてきたり、考えがまとまってくることはよくあるので日常的な話し相手が大事。経験の少なさと成功体験があるというのは決断力に繋がるので大事なこと。
- 一緒にそういうこと(趣味の話など)聞いてくれる人がいるといいと思う。
- 話せる相手や帰属感が持てる場や人があっているんなことを決断する経験や知識、情報が得られるといい。
- 家族の中でどのように居心地を感じているのか。同じ趣味の集まりで自身の安定する居場所を持てたらいい。
- 本人の趣味の話というのは、アニメ、動画が主。本人と年齢が近い支援者とは話が合う様子。
- 本人が就職希望している点に関しては、どのくらい現実検討できているか、主治医が就労可能と判断しているのか、どのような部分を課題と感じているのか等をアセスメントしたい。保健師は細く長く関わりが必要。
- 将来的なことのイメージができていないと思ったのでピアカウンセリングで体験を聞いて方向性を決めるのもいい。江戸川区でそうした活動を聞き、ピアの中で主体的にテーマを決めたり話しているのを聞くと、文京区でもそうなればいいと思う。どこにも通っていなかったり、就労している方はそうした機会がないので、場の提供ができるようになれば

と思う。

- 病院に通っているのかわからないが、病院にも話を聞いてくれる人がいる。病院は比較的担当が代わらずにずっと聞いてくれるイメージがあるので変わらない相談者としていいと思う。
- 医師と連携したカウンセリングを受けることが一番早い。人を変えながら誰が合うかを模索し、本人の決断することに対して合うカウンセラーが見つかるという。
- 幼少期に両親のもとで安心した発達が難しかった方が、社会に出て何に困っているかもわからず相談に来ることは多い。「決断してこなかった本人が悪い」と、その方のせいに行われている印象を受ける。経験を持てなかったのは幼少期の複雑な環境があったため、そのことを支援者が理解する必要がある。過去にどのような事情を抱えて生きてこれたのかを周りが理解して支援に当たることが重要。
- 就職したいかどうか、本人の意思かどうか気になった。幼少期からどのようなチャンスがあったのか、今それを取り返していけるか、見ていくといい。文京区でも伴走型支援が始まっている。伴走者がいたかないかで変わってくる。
- 20代ならまだ過去のことを追いかける。養護施設と連携がとれるはず。児相の情報は制度上、情報開示できないので、制度的な面を訴えていかななくてはいけない。それぞれのライフステージにジェノグラムが完成できるといい。
- 虐待を受けていると人間関係の形成は困難、幼児期や学齢期、青年期を反芻していきながら現在に戻っていく必要があるケース。核となる相談支援機関があるので、この人に対する伴走型支援のチームを再構成し広げていける。
- この内容は親会で報告する。3月に専門部会の合同発表でも報告することになる。

## (2) その他

- (配布しているチラシに関して)東京都福祉保健局の事業で、障害の社会モデル実践講座の案内。チラシは1月実施分までだが、2月にも実施予定。後で社協にファイルを送る。キャラバンはいろんな地区でやっている。学齢期の方の母親を中心にそうした活動を進めている。
- 社協で地域福祉活動計画のパブリックコメントをやっている。地域の様々な生活課題の解決に向けて4年間でどのような取り組みをしていくか。よければご意見いただきたい。ホームページからも見られる。1月4日木曜日まで。
- 次回の権利擁護専門部会は2月予定。

以上

# 文京区障害者地域自立支援協議会 全体会のご案内

## ☆開催目的

文京区では、地域の障害者等を支援する方策を総合的に推進することを目的に、文京区障害者地域自立支援協議会を設置し、地域の関係機関によるネットワーク構築の推進を図っております。

この度、各専門部会の活動を理解し、部会間の連携の充実を図る目的から、全体会を開催します。

### ◆日時

令和6年3月18日(月) 14:00～16:30

### ◆場所

文京アカデミーレクリエーションホール(シビックセンター地下1F)

### ◆対象

自立支援協議会委員・各専門部会委員、事務局等

## ☆内容(予定)

1 自立支援協議会全体会の趣旨説明

2 区の現状・制度説明

3 当事者部会委員より半生を語る

当事者委員より、これまでの生活で感じたことなどを発表いただきます

4 専門部会より活動発表

5 トークセッション

「自立支援協議会のこれまでとこれから」をテーマに行います

6 当事者部会委員より感想

当事者委員より、本日の感想、部会に参加しての感想を発表いただきます

## 《申込方法》

QRコードまたはお電話からお申込ください

提出先 文京区障害福祉課障害福祉係 TEL:03-5803-1211



主な取り組み

- ・平成29年～令和元年度：【選挙の投票支援】区内施設での投票支援や狛江市での取り組みについて
- ・令和元年度：知的障害関係親の会の方との成年後見制度の勉強会・意見交換を開催（講師：司法書士）
- ・令和3年度：当事者部会委員の体験談の発表から意思決定支援を考える（当事者部会との合同開催）

課題の共有

- ・成年後見制度を軸に、制度の課題や意思決定支援のあり方について、投票支援や当事者の体験談から学んできたが、成年後見制度の課題や限界が明らかになり、地域で権利擁護を支える「仕組み」を、「ライフステージにおける必要な支援とは」という視野に広げて検討することが必要。
- ・特に成年後見制度の利用前において、相談の機会や利用のタイミングの難しさなどが挙げられた。

令和4・5年度

- ・「ライフステージ（ライフイベント）」における必要な支援や相談支援体制、意思決定支援について、部会員からの事例を基に検討。また、様々な背景を持つ部会員から構成されているため、事例を通じて共通認識を図る。
- ・上記を基に、必要な支援や相談支援機関につながるようなツールなどについて、次年度以降検討する予定。